

Region Vivir

レジオン・ヴィヴィ



社会福祉法人
県央福祉会

Region Vivir は、スペイン語で地域で暮らすという意味です。
これからは障がいがあっても地域で豊かに暮らす時代だと思います。

発行者 社会福祉法人県央福祉会
発行所 神奈川県大和市柳橋 5-3-1
URL <http://www.tomonori.or.jp/>
発行責任者 柴田 琢
編集責任者 小林 裕一郎
印刷 ワークス桜舎
デザイン 荒 奈津美

No. **46** 2025
6.30

「どこにでもある」ではなく、「県央福祉会にはある」を実現するために

社会福祉法人 県央福祉会 理事長 柴田 琢



お辞儀の美学

振り返れば、新体制になり「あっ」という間の3年でした。この間100回頭を下げて1回褒められる、割合で言えばこんな繰り返しであったように感じています。謝罪の際は、誠心誠意謝ります。時には自分の謝り方に納得ができず、普段は開けっ放しの理事長室の扉を閉め、何度も何度も謝り方を練習しました。どうすれば相手に誠意が伝わるのか。当然気持ちが大切ですが、私は見た目の印象も大事だと考えています。自分にできることは何なのか、鏡を見ながら、そして自分の姿を写真に撮りながら自分が納得いくまで数えきれないほどお辞儀を繰り返しました。最初は何度お辞儀をしても自分が思い描いている凛としたお辞儀姿には程遠く、悪戦苦闘しました。

その際お手本にしたのは、県央福祉会で約7年間経営学の勉強をさせていただいていた「森川塾」の森川弘文先生より学んだ「お辞儀」でした。まずは形から入ろうということで、JAL社長の鳥取三津子氏の

お辞儀の経過

STEP1

今までの
お辞儀



STEP2

練習半ばの
お辞儀



STEP3

少しずつ
形になってきた
お辞儀



01 「どこにでもある」ではなく、「県央福祉会にはある」を実現するために
(理事長 柴田 琢)

03 支援者の一人として大切にしたいこと (理事・執行役員 高木 悦子)

04 人間力 (執行役員 八十島 清隆)

05 2024年度実践報告会レポート

06 特集① 30周年記念事業所紹介 バステルファームワーキングセンター

08 特集② 10周年記念事業所紹介 あさみどり保育園

09 特集③ 10周年記念事業所紹介 スカイキング

10 県央福祉会の社会貢献活動をご紹介します！

12 助成金受給 広報委員からのひとこと 編集後記

お辞儀を紹介されました。映像で見る鳥取氏のお辞儀は、私が思い描いていた凛とした清潔感があり、謝罪している鳥取氏には品位を感じるものでした。森川先生は、

「鳥取三津子氏のお辞儀は芸術の域に達している。トップ経営者でこのようなお辞儀ができる人はいない。謝罪と感謝の念が形に表れている」と賛美されていました。

私はまだまだ未熟ですが、足腰に力を入れ、お腹と腕に力を入れ、背中と首に力を入れる。そうすることにより、相手側にもより誠意が伝わるお辞儀となるのです。これがどれだけ難しいことか、何度も練習する中で私の体がそう教えてくれました。皆さんもこの機会に是非お辞儀について少し考えてみてはいかがでしょうか。

2024 年度の漢字一文字は「減」

2024 年度は頭を下げる回数も減り、経営的にも資金面の心配も減り、新規事業も行わなかったため職員の玉突き人事や金融機関からの借入も減りました。そしてその中で何よりも減ったものは「求人」でした。求人募集のサイクルが減ったのなら何も言うことはありません。減ったのは求人による応募です。ひどい時期は 80 事業所以上で求人を募集する事態にまでなり、事業所運営にも影響を及ぼす状況となりました。

しかし、人事部の電話が鳴らないわけではありません。電話の数はこれまでの求人募集よりも多いくらいです。では、どこからかかってくるのか！それは紹介業者の方からの電話です。応募者個人からの連絡は 100 に 1 つの割合という状況です。

県央福祉社会は言わずと知れた小さな事業の集合体です。大規模事業所で 1 人、2 人の職員が欠けた話とはワケが違います。

それなら、大規模な事業所を運営すればよいのではないかと、基準を満たしているのなら、1 人の職員がより多くの利用される方に対応すれば良いのではないかと、と言われるかもしれません。しかし、「障がいがあるがなかろうが地域の中で地域の方とともに暮らしていく」、「職員一人ひとりの支援の質を高め、利用される方に寄り添うことができる」という県央福祉社会が県央福祉社会である由縁があるからこそ、そこを目指さなければ県央福祉社会である意味がありません。

そのため、事業所が一刻も早く人が欲しい状況でも、不採用を出させていただくこともありました。性急かつ安易に採用した結果、事業所で新たな問題が発生するなど却って混乱を来たことが往々にしてあるからです。ただ、その中でも嬉しいこともありました。それは一度不採用になった方が、自分の腕を磨き再度応募してくれたことです。

「どこにでもある」ではなく、「県央福祉社会にはある」を実現するために 2025 年度も県央福祉社会は邁進していきます。



(撮影場所：引地川親水公園)

支援者の一人として大切にしたいこと

社会福祉法人 県央福祉会 理事・執行役員 高木 悦子



児童療育の領域で長年仕事に携わってきましたが、ここ数年は、特にサービスの枠組みに大きな変化がありました。児童へのサービスが自立支援法から児童福祉法の枠組みに変更となった平成 24 年以来の大きな変化であると感じています。

昨年の介護報酬改定はニュースでも大きく話題になりましたが、児童療育の分野においても単価の一部引き下げがあり、時間区分による報酬体系も初めて導入されました。また、児童発達支援、放課後等デイサービスに続き、保育所等訪問支援にもガイドラインが策定され、支援の内容も多岐にわたって求められるようになり、さらに支援プログラムの公表が義務化されています。これまで作成していた個別支援計画や会議録などのフォーマットも変更することになりました。そのほか、虐待防止、身体拘束適正化への取り組み、BCP 作成、感染症対策、安全計画策定等、さまざまな必須事項があり、支援内容の質の向上を目指したいのに、それ以外の業務に追われているような状況が続いています。収入が減少しているにも関わらず事務作業は増え続け、さらにのしかかる人手不足の嵐……。おそらく、以前には経験したことがないような苦境に晒されていることを、私は特にここ最近はひしひしとを感じるようになりました。

一方で少子化の進行が叫ばれているにも関わらず、小中学校支援学級や支援学校の在籍者の実数が増加していると言われていきます。また、障がい児（者）は増えているのかという議論も多く聞かれ、医療の進歩、診断の認知度の高まり、その他にも様々な要因があげられていますが、本当のところはよくわかりません。そのことと相まって

か、介護保険と同様、株式などの参入により事業所数は爆発的に増加しており、これまでのようには利用者さんが集まらないという現実があるのも事実です。また、ご家族のニーズも多様化しており、社会福祉法人が経営する事業所の役割を改めて考えることが多くなりました。収益が得られないのは困りますが、一方で、利益優先ではなく、やはりお子さんとご家族を優先に考えたい、そのことをバランスよくやっていくことに、常々課題や難しさを感じています。

ただ、そのような状況は支援を求めて来られるお子さんやご家族には関係がありません。私たち支援者には相談に来られる方に真摯に向き合うことがまずは求められており、自分たちが役立つためには何ができるのか、子ども達の成長や発達に必要なことは何かを考えることが私たちの最も大切な役割であることには変わりありません。

例年にない長期の冬休みが明けて、さて、今日から仕事はじめというその日の夜に、大学院時代に教えを受けた先生の訃報が入りました。ケース理解の深さと的確かつ鋭い指摘、そして、常にケースに向き合う支援者の人としての姿勢を毎週のゼミで問われ、緊張感漂う時間を過ごしました。そうしたやりとりを懐かしくも背筋が自然に伸びるような気持ちで思い返し、今の児童療育の事業所がおかれている厳しい状況の中でも、自分たちの役割を全うすることが大切であると再認識しています。「専門職としてクライアントから役立つと思ってもらうには、自分の在り方をまずは振り返るように」との恩師の言葉を改めて噛みしめています。



人間力

社会福祉法人 県央福祉会 執行役員 八十島 清隆

福祉の仕事を 30 代前半から始めて、今 60 代も後半。35 年近く福祉の仕事を元気に続けていられることは、本当にラッキーだと思っています。健康な体に産んでくれた親には感謝しないといけないなぁと思いながら日々を過ごしています。

「挨拶は大きな声で」「返事はハイ」「作ってくれた人に感謝して米粒一つ残さず食べる」。こんな躰を小さい頃から厳しく言われ続け、若い時は親を「うるさい！鬱陶しい！」と思ったりもしたことがありましたが、社会と接するようになってから、しみじみと親に感謝しました。社会に出た時、いろいろな世代や考え方の人と接するたびに、体に染み込んだ習慣から自然と、挨拶は大きな声で、声をかけられれば元気に「ハイ！」と答え、食事を残さず食べていました。そうすると周囲からは「気持ち良いな」「いつも元気だな」「美味そうに食べるな」と言われ、どこに行っても可愛がられました。こんな時、親の厳しかったけれど人として躰てくれた愛情を感じ、それが自分の人間力の核になっていると思っています。人間力では元気を源として、三つの「気」を常に意識しています。『元気』『根気』『勇氣』を持って物事に向かい合っています。心身ともに元気であることが、様々な行動をするためには必要なこと。元気であれば途中であきらめずに、目標に向かって最後までやり通すことができます。継続は力なりと言われるように根気が育まれます。そして、失敗を恐れず何事にもチャレンジ。一步前に踏み出す勇氣が生まれます。この三つの気が、自分の人間力の強みとなっています。

今、福祉の仕事に携わるなかで、いつま

でもアクティブに、何かにチャレンジできて楽しいと感じています。元気に本気で人と関わりたいと感じているうちは、福祉に関わり続けたいと考えています。どんなに才能があっても、どんなに VIP な存在でも、病気で寝込んでいたらもったいないことで、元気でいることが一番の価値だと思います。

先日、教職に就いていた時の仲間と 35 年ぶりに会いました。ほとんどの仲間が 60 歳を過ぎ仕事をセミリタイアしていました。人生観はそれぞれですが、ありがたいことに最前線で奮闘しているのは、自分一人。

福祉は常に人と接する仕事なので、くたびれた顔をしてはいけなくと思っています。周囲を元気に勇気づけられるくらいのオーラを漂わせるように意識しています。福祉の仕事を続けるためには、アクティブでないといけませんが、仕事をしているからこそ、いつまでもアクティブでいられるのかもしれませんが。まだまだ福祉に携わりたいので、いつでも人と接することが楽しめるように元気、根気、勇氣をもってアクティブに日々を重ねていきたいと思っています。



2024 年度 実践報告会を開催

(2024 年 12 月 19 日 大和市保健福祉センター大ホール)

基調講演と実践発表 参加者は熱心に聞き入る

基調講演では、ふきのとう舎の利用者ご家族の今井様より「我が子との歩みを振り返る」と題して、養護学校卒業から現在まで 35 年間にわたる思い出を披露していただきました。

ふきのとう舎での親の会の活動から会長就任、そして親の会の解散までの取り組みや、息子さんにまつわるエピソードをお話されました。鎌倉の山を登っているときに、息子さんの姿を見失ってしまい、警察に捜索を依頼し無事に発見され、そのことが広報に掲載された話や、乗車する電車を間違えて違う駅についてしまい、そこから目的の駅へ戻ろうと息子さんが線路を歩いてしまい危うく事故に巻き込まれそうになったこともあったそうです。今では、掃除や洗濯物干し、食事の準備など家事を担ってくれると言います。

そして最後に「私たちは県央福祉会、ふきのとう舎に出会えたことに感謝している」という温かいエールを送ってくださいました。

次の実践発表では、2 つの事例が報告されました。1 つ目は厚木 ASD 支援センターの坂口さんが「成人自閉症の方の更なる自立を目指して」を発表。重度の知的障がいに伴う自閉症の利用者さんについて、将来グループホームの利用を見据え色々なことが自身でできるようにと取り組んだものです。目標に設定したテーブル拭きは当初、全くうまくいきませんでした。職員が何度も試行錯誤を重ねるなかで自立してできるようになりました。今後は今回の支援システムが確立すれば自身の机や、自宅やグループホームでもテーブルが拭けるだけでなく、他のスキルも獲得できるのではないかと考えています。

もう 1 つの実践報告は、公私連携型保育所ななつぼしの川北さんと小村さんによる「保育士による地域交流の第一歩」です。同施設には保育所のななつぼしと子育て支援施設のこどもー大和が併設されています。2024 年度からは、ななつぼしの保育士が「ななつぼしタイム」という交流イベント

をこどもー大和で開催し、双方の連携を実現。イベントでは運動遊びや手作り楽器演奏、絵本の読み聞かせなど計 6 回実施しました。今後はそれぞれで開催している夏まつりを合同開催するなど、さらなる地域交流を深化させたいとの話がありました。

能登半島地震の被災地支援を通じて学んだこと

休憩を挟み、能登半島地震の被災地支援活動について 3 名が報告しました。まず、アグリシステム羽沢の元職員は「能登の障がい福祉施設支援」について発表。2024 年 6 月と 10 月の 2 回、能登にある施設の支援や活動に入りました。2 回の派遣を通じて「平時にできないことは、災害時にはできない」ということを痛感したそうです。

ら・すてら上和田の的場さんは「災害時の地域支援について」と題して 6 月と 9 月の 2 回、輪島の仮設住宅に訪問した時の活動を報告。訪問先では感謝される一方で、行政への不信感や怒りの声を聞くこともありました。その経験からニーズ把握の難しさを実感するとともに、適材適所への人材派遣が必要だと訴えました。

続いて、近藤常務理事が「被災地の福祉的支援と BCP の意義」について報告しました。

最後に、学研アカデミーの内田先生が講評を行い、「県央福祉会は社会福祉法人としての地域貢献の役割をしっかりと果たしていることが伝わった」と述べていただきました。

(取材・執筆：広報委員 青木)





特集① 30周年記念事業所紹介 パステルファームワーキングセンター



30周年を迎えたパステルファームワーキングセンター。所長である山崎さんと副所長の須田さんを中心にインタビューをしました。30周年を迎え、それぞれの思いをお話ししてくれました（クマのイラストは、30周年祭に向けて、利用者さんがデザインをしたものです）。

①パステルファームワーキングセンターってどんな事業所？

パステルファームワーキングセンターは県央福祉会の二つ目の「知的障がい者授産施設※1」として、1994年4月に定員30名でスタートしました。知的障がいのある方の働く場として活動をはじめ、今では相談支援事業※2もおこない、障がいのある方の生活を支えています。「働くことで自信を持ち、自分らしく地域で暮らす」ことを目標に活動を続け、2025年1月末現在66名の利用者さんと48名（常勤17名・非常勤31名）の職員がいる大きな施設となりました。重度の障がいを持っている利用者さんも多くいらっしゃいますが、それぞれの出来ることを活かして「働くこと」にチャレンジしています。そして頑張った成果としてみなさんがお給料日を心待ちにしているとのこと。働くことへの喜びを感じながら自分らしく暮らす目標は開設当時から変わっていません。利用者さんの中には、居心地の良い場所である、自身の居場所と認識をし開所から30年通い続けている方が16名もいらっしゃいます。

※1 知的障がい者授産施設とは…さまざまな事情から一般就労や十分な収入の確保が難しい人を対象とし、就労やスキル習得・自立をサポートする施設を指します。現在の日本における授産施設は、「生活保護法」に基づく授産施設（生保授産施設）と「社会福祉法」に基づく授産施設（社会事業授産施設）の2種類です。

※2 相談支援事業とは…障がい者や家族から相談を受け、アセスメントのうえ助言や情報提供、支援にかかる計画の作成、関係機関との連絡調整、モニタリングとフォローなどを行う事業。（出典：WAM NET より）

②パステルのこだわり・製品紹介

「立ち上げ当初の職員が積み重ねてきた地域との関わり」を30年経った今でも大切にしています。コロナ禍前は、市内の学校の学園祭に商品販売の依頼があったり、小中学校などの教育機関からも見学の依頼があったりと地域に根付いた施設です。利用者さんはA～Eグループに属しています。基本的には、このグループで作業を行うことが多い中、利用者さんの気持ちを第一に考えたときに違う作業をしたい方もいます。その方の気持ちもしっかりと聞き入れ、曜日や体調で変更をすることもあります。利用者さんが作っている製品として①お煎餅 ②いもチップス ③キャラメル ④マドレーヌ ⑤ケーキ（レモン・紅茶）があります。たくさんの製品を注文に合わせて、個別対応をしながら日々お仕事をしています。

③今後の展望

今後も30年前に立ち上げたときの思いをつないでいくことを大切にしたいです。どんな障がいのある方でも健常者と同様に「働く」機会を得て、喜びを得ること、その根本の思いを忘れず利用者さんとともに活動を続けていきたいと思えます。

新たな取り組みとしては、利用者さん一人ひとりに喜んでいただくため「個別プログラム」を2025年度から始めます。個別プログラムの構想は1年前ごろから。コロナ禍で制限がかかってしまい出来なかった余暇（レク）の再開は、その時に入職した新卒職員など経験がない職員もいるため不安の声もありましたが、何が出来るのか考え話し合ってきました。挑戦には大変さもあると思いますが、その中でも達成感とのバランスをとり職員のモチベーションにつなげていってほしいと副所長の須田さんからお話がありました。

30周年式典&パステル祭 ～主役は君だ！！ Everyone Be Ambitious！！～



パステル祭で使用した看板

2024年9月28日（土）に30周年を祝う式典が執り行われました。毎年行っている事業所のお祭りパステル祭と合わせて開催し、来賓には相模原市の本村賢太郎市長はじめ、開所当時の職員も出席してくださり懐かしいメンバーが集まったそうです。その他、地元で活動をしている上溝鼓笛隊さんも参加、オープニングを飾ってくれました。最後には利用者さんと職員そろって龍舞を披露！式典を盛り上げました。

開催にあたりパステル祭実行委員長はじめ、職員みんなで話し合いパステル祭テーマは「30周年で終わらないよ」と意味を込めて、上記のテーマ「主役は君だ！！ Everyone Be Ambitious！！」に決まりました。このテーマに沿って、1年間職員でたくさん話し合いをしてきました。パステルらしさとは？どのくらいの規模にするの？来賓はどうする？などたくさんの意見がでました。その結果、利用者さんが一緒に出来ることをやりたい、そして来賓には立ち上げ当初のメンバーにも声をかけることになりました。イベントを盛り上げるのに忘れてはならないのが、利用者さんです。「主役は君だ！」のテーマにもあるように、このイベントのために龍舞の龍を作ったり、当日の進行を職員と一緒にしたりとたくさんの利用者さんと作り上げた30周年式典とパステル祭となりました。

実行委員長はイベントを振り返り「チームで作りあげました」と話され、誰か一人がやるわけではなく自然とみんなでやる、ができるのがパステルのよさとも語ってくれました。また「2025年度は式典がない分、お祭り自体を充実させたい」と意気込みも聞くことが出来ました。

（取材・執筆：広報委員 吉田）



左から、柴田理事長・本村市長
小川後援会会長・松本常務理事



開会式を盛り上げてくれた
上溝鼓笛隊



利用者さんと一緒に作った龍舞



事業所データ

住所：〒252-0244

相模原市中央区田名 5012-5

電話：042-760-3170

特集② 10周年記念事業所紹介 あさみどり保育園

2024年度10周年（2014年に開所）となるあさみどり保育園。佐久間現園長と萩原前園長に開設当時の思いや今まで、これからのことを聞きました！

①あさみどり保育園事業所概要 ～どんな保育園？～

あさみどり保育園ではあそびを通して「あたま・からだ・こころ」を育て、子どもたちの学びに向かう土台づくりを目指しています。園内には「構造化」の視点も。障害分野から福祉の世界に入った県央福祉会のノウハウが生かされています。県央福祉会のソーシャルインクルージョン（共生社会）を目指す理念も感じられる園です。

②開設の当時の思い・エピソード

建設のきっかけは、地域に住まわれていた並木さん*1から「所有している自宅を保育園にしたい」と県央福祉会に相談があったことでした。あさみどり保育園のある鶴の台小学校学区には保育園がなかったため、建設が決まった際はSNSでも取り上げられて注目されていたそうです。しかし4月開所なのに2月になってもトイレが納品されなかったり（記録的な雪の影響）、震災の影響でエレベーターの用意ができず急遽間取りを変更したり…トラブル続きのなか周囲から「本当にできるのか」と心配の声もありましたが、なんとか開所となりました。開所後も施設も職員も新しく、何かあるごとに集まってはよりよい保育を届けるために話し合っていたことを覚えています。今では見学にくるご家族から「人気ですね」と嬉しい声をいただけるようになりました。



*1 並木昭五郎さん
様々なことで気にかけていただいていたとのこと。園のイベントにも参加されていました



*2 ブンネメソッドの様子
資格をもった指導者による練習風景。
子どもたちの発表会も行われます

③あさみどり保育園のここがすごい！

あさみどり保育園では特色あるプログラムとして①忍者修行（表現あそびのひとつで非認知能力を高めるプログラム）、②スウェーデンの教育現場で使われる「ブンネメソッド」*2という音楽活動、③絵画教室、④専門講師による体操教室があります。プログラムについて佐久間園長は「豊かな感性を養ってほしいと思っています。それは保育園にいる間には芽吹くかはわからないけど、花咲く時がくるかもしれません」と、子どもたちの未来を思い語っていました。

④今後の展望や保育園事業について

法人の保育園も10園まで増えました！柴田理事長が掲げる『明るく、楽しく、元気に』をモットーに、すべての園を笑顔溢れる保育現場にしていきたいと思います。

（取材・執筆：広報委員 加藤）



事業所データ

住所：〒252-0311

相模原市南区東林間 2-22-6

電話：042-705-8653

特集③ 10周年記念事業所紹介 スカイキング

2024年度で10周年を迎えたスカイキング。これからの展望も含めて、現場で働く大箭支援員にお話を聞きました!!

①【事業所の概要】

スカイキングは横浜市保土ヶ谷区天王町にある、就労継続支援B型の事業所です。定員は20名で現在は16名の利用者さんがピザづくりやお店での接客・軽作業などの作業をしています。

【カフェの営業時間】

11:30～15:50 日・月休み

他にも横浜国立大・天王町イオン・横浜市役所・保土ヶ谷区役所などでも販売をしています。



外観や内装はおしゃれな
カフェレストランです



②事業所の特色

スカイキングの特色は利用者さんの力をたくさん発揮していただけたところです。普段のカフェの運営からカフェのメニュー開発やPOP作り、お店のInstagramの更新まで利用者さんにやっていただいています。昼食もご自身の分のピザを自分で作り食べることもあるそうです。このように利用者さんが主体となっている事業所です。



売りは“手作りピザ”です

③【開設当時の苦勞、思い出等】

当時天王町商店街にある家具屋さんの店主は「店舗を縮小してその一部を福祉施設の店舗にしたい」という思いがあったそうです。社会福祉法人 横浜共生会の方を通して県央福祉会にお話がありました。その話を受けて当時パン屋の運営も検討されましたが、店舗の広さと設備面での課題があり断念。検討した結果、ピザ屋を運営する方向で話が進められました。当時の理事長であった佐瀬の「本格的なナポリピザを提供したい」という思いから、初代所長に決まっていた職員が埼玉県にある会社で研修を受けることになりました。試行錯誤の連続であったそうです。

④今後の展望

まずはスカイキングを地域に理解されるようなアットホームなお店にしていきたいと考えています。そのため、商店街のイベントに参加したり、子ども向けにキッズプレートメニューに加えたり積極的に活動をしています。ここで働いている利用者さんに「働くことが楽しい」と思ってもらえるようにしていきたいです。そして、利用者さんがステップアップできる、次へ繋がるような支援を目指したいと思います。

(取材・執筆：広報委員 工藤、安達)



事業所データ

住所：〒240-0003

横浜市保土ヶ谷区天王町 1-8-3 ラ・ポルト 1F

電話：045-442-5046

県央福祉会の社会貢献活動をご紹介します！

県央福祉会では社会貢献活動推進プロジェクトとして、さまざまな活動を展開しています。2024 年度はランドセルプロジェクトと献血プロジェクトを実施しました。それぞれの活動についてご紹介いたします。

ランドセルプロジェクト

社会貢献活動推進プロジェクトでは2023 年度に引き続き、「株式会社こどものため」様のご協力により、ランドセルプロジェクトの活動に参加させていただきました。同プロジェクトは約 3 か月間ランドセルと未使用の文房具の寄付を募り、2024 年度は集まった物を沖縄県のうるま市に寄付をするという内容です。

2024 年度県央福祉会ではランドセル 11 個、その他ノートや鉛筆、画用紙等の文房具の寄付が集まりました。ご協力いただきました皆様ありがとうございました。

沖縄県における子どもの貧困率は 29.9% と全国の貧困率 13.5% に比べ 2.2 倍と高い状況になっています。中でも沖縄県中部に位置するうるま市では、市民所得が県内 41 市町村中 39 番目と低く、失業率や母子家庭率、児童扶養手当割合も高い状況にあります。



うるま市役所で行われたランドセルの贈呈式にはうるま市こども未来部長、こども政策課課長が出席され、当法人からは私が出席させていただきました。その後、児童交流としてみどり町児童センターで社会福祉

うるま市
イメージキャラクター
「うるうらら」



うるま市の子どもたちとの交流

法人ハッピーネット様による動画視聴と質問コーナー、こどものため様によるリズムトレーニングが行われ、私も一緒に参加しました。子どもたちからは貧困というワードは全く感じられず元気いっぱい、こちらが元気を分けてもらいました。

うるま市には観光客があまり立ち寄らないことも所得の低さの一因と聞きましたが、「勝連城跡」という世界遺産からの景色はとても綺麗でした。また、株式会社ぬちまーすという沖縄の方言で「命の塩」という沖縄の海から生まれた海洋成分を多様に含んだ塩の工場もありました。実際に購入してみましたが、普通の塩とは何かが違う気がしました！ 私の舌は甘いかしょっぱいくらいしか分からないので、ご興味のある方はぜひ一度ご自身で試してもらいたと思います。沖縄の中ではマイナーな地域かもしれませんが、沖縄を訪れた際にはぜひ立ち寄ってみてください！

(社会貢献活動推進プロジェクト 猪瀬)



勝連城跡。頂上からは太平洋に輝く海が一望



株式会社ぬちまーす
の工場入口。
工場見学もできる

献血プロジェクト

日頃より、献血プロジェクトにご理解とご協力いただき、ありがとうございます。

2024 年度も、大和エリアと相模原エリアにて開催し、多くの方のご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

社会福祉法人の社会貢献活動が義務化されたことを受けて始まったプロジェクトですが、日々の暮らしの中で、誰でも怪我や病気で輸血を必要とする可能性があることを考えると、極めて公益性の高い活動であると考えています。

輸血用血液製剤を使用されている方の約 85%が 50 歳以上である一方、献血をしている方の 60%以上は 50 歳未満の方々であるにも関わらず、若年層（10～30 歳代）の輸血者数は減少傾向にあります。日本の少子高齢化が今後ますます進むと、将来の安定共有に支障をきたす恐れがあります。

今後も社会貢献プロジェクトでは、引き続き献血活動を行っていくと同時に、広く地域の方々にもご協力いただけるような仕組みづくりを考えていきたいと思っております。

皆様、今後とも献血活動にご協力いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

(社会貢献活動推進プロジェクト 岩鼻)

2024 年度助成金受給

ぽらーの上和田（大和市）

このたび、日本財団様の助成により、車両を配備することができました。日々の送迎や外出活動などに活用させていただいています。最新の設備で快適な乗り心地です。ありがとうございました。

助成品目：車両
(日産セレナ)



広報委員からのひとこと



取材を通して他事業所・他分野のことを知る良い機会となりました。お忙しい中、快く取材を引き受けていただいた皆様本当にありがとうございました。（吉田）

読者の皆様に県央福祉会の取り組みや魅力がもっと伝わるよう、引き続き誌面内容の充実を図っていければと思います。（青木）

レジオンヴィヴィの取材を通して他事業所の魅力をたくさん知ることができました。今後はその魅力を読者の方にも知っていただけるような広報誌を作成できればと思います。（工藤）

レジオンヴィヴィの取材でお世話になった皆様ありがとうございました。「広報誌も変化をという」方向で進めてきた一年でした。まだまだ案の域を脱しておりませんが、これからも良い意味での変化を意識していきたいと思います。（安達）

取材を通して事業所や地域の方の思いを強く感じました。今後も見ているすべての方が面白いと感じてもらえるような広報誌にしていきたいです。（守家）

はじめて広報委員としてかわらせていただき、取材を通して各事業所さんの施設そしてご利用者様を思う気持ちに触れ、気づきの多い一年となりました。ご多忙のところ取材を受け入れていただいた事業所の皆様、ご利用者の皆様ありがとうございました！（加藤）

オブザーバーとして参加させていただきました。委員の皆さんは本来業務を持ちながら精力的に取材や記事の執筆などされています。そこも踏まえて見ていただきたいと思います。（鈴木）

編集後記

初の委員長として、今までのレジオンヴィヴィを刷新したく進めて参りました。委員の皆様を支えていただき、少しずつではありますが、変化の一年に慣れたかと思っています。今後も読者の方々に読んでいただけるよう魅力ある内容に出来たらと思います。（小林）

編集委員

ふきのとう舎 小林
法人本部 青木
法人本部 守家

かたくりの里 工藤
障害者自立生活アシスタント 安達

あさみどり保育園 吉田
ライム 加藤
百合丘就労援助センター 鈴木